

住宅利用の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41397

10. 住宅利用の変化

渡部 耶恵

1. はじめに
2. 伝統的な住宅の特徴
3. 住宅利用の変化とその社会的背景
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

実習で珠洲に滞在中、多くのお宅に訪問する機会があった。どの家も大きくて開放的であり、一部に共通した間取がある事に気付いた。また、昔は冠婚葬祭などの行事を家で行っていた、というお話を聞いていると、この地域の家には「生活・憩いの場」としての役割だけでなく、「社会的な場」としての役割があったのでは、と感じられた。しかし近年では、家の「社会的な場」としての性格が薄れてきており、この地域での住宅の役割や性格が変化しつつある、という事も、多くの方からお話を聞いているうちに読み取る事ができた。

そこで本章では、家の間取・部屋の使われ方の変遷を見ながら、その変化の背景を考察していきたい。

2. 伝統的な住宅の特徴

本節では、宝立地区をはじめとする奥能登地域で多く見られる伝統的な家屋の間取り、各部屋の機能などについて記す。本文中では「伝統的な家屋」のことを、1960年代の高度経済成長期以前に建てられ、以下に挙げる図1に類似した間取りを持つ家屋であると定義する。

尚この定義は、文献調査¹⁾や聞き取り調査から、高度経済成長期を境目にして間取りや住宅利用の考え方が異なっていると考え、筆者が考案したものであることを断っておく。

2.1 家の大きさと農民の階層

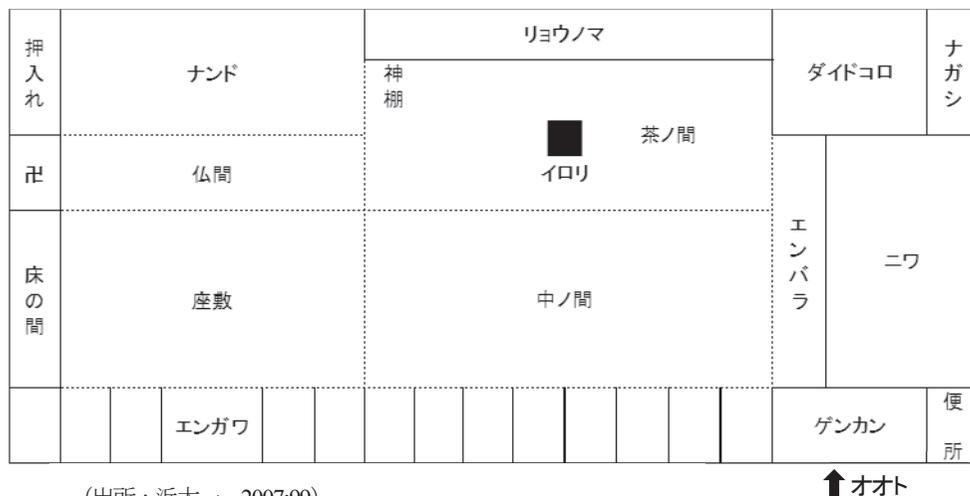
農民の階層が上がるにつれて、家屋が大きくなる、という傾向がある。

標準規模の家は間口六間、奥行き四間の大きさで、自分の耕地をあまり持たない農家に多かった。自作農階級では間口八間、奥行き五間の大きさになり、本百姓の中でも力を持つ「オヤッサマ」階級では、間口九間、奥行き六間と大規模な家屋が見られた。いわゆる「クロッケンの家」では、茅葺屋根の葺き替えに多大な労力・費用負担が可能な家柄が多く、過去に村役人を務めた家が多い。

農民階層・家屋の規模によって間取りが大きく異なる、といったことはあまり見られない。

2.2 間取り構成の特徴

図1 奥能登型の住宅間取り図



伝統的家屋の間取りは、「ニワ」と呼ばれる土間部分と「イタバ」と呼ばれる板張りの部分に大別される。

イタバの中でも、冠婚葬祭など行事に使われる公共的な部屋、家族の日常生活の場となる部屋、といったように各部屋で公私の役割を使い分けているのが、この地域の家屋の特徴であると言える。前者には上座敷・中ノ間・茶の間が、後者には台所・流し・納戸・下ノ間がそれぞれ該当する。また、行事にあたって着替えなどの準備を行うジョーノマ・ケショーノマも設けられている。

多くの家に共通して見られる点として、座敷・中ノ間・仏間で構成される「鍵座敷」が目立つこと、茶の間を中心とした間取り配置であること、が挙げられる。これらの点から、各家に接客や宗教行事を優先させる配慮があったことがうかがえる。

2.3 各部屋の機能とその変化

ゲンカン（玄関）

妻入りの前面に四～六尺幅でオロシの屋根を持っている。常に開放されている。陽が当たり雨露をしのぐことができるので、日常的には物干し場や子供の遊び場となったほか、収納場所として農作物の取り込みにも用いられた。ニワへの入り口には、「オオト（大戸）」と呼ばれる六尺幅の板戸が設置された。

ニワ（土間）

農作業の機械化が進んでいなかった時代、ニワは農家にとって重要な仕事場であった。秋は水稻の脱穀や調整を行い、冬には藁仕事が行われていた。ニワで餅や味噌を搗くこともあり、ニワは生活・産業に関わる行為の舞台となっていた。また、ニワの片隅にダイドコロが設置され、炊事の準備が行われていた。

コメをはじめとする商品・食料を取り扱う場所であったため、ニワは常に清浄であるよう心掛けられていた。平素から土足での立ち入りを禁じ、簀子やコモなどを敷いて土間表面が傷むのを防いだ。秋の収穫前にはニワハキ（庭掃き）が念入りに行われていた。

終戦後の農地改革を機にニワの改良が進んだことや、脱穀・調整などが機械化されたため農作業を日中の屋外で済ますことができるようになったことで、ニワの農作業の場としての役割が次第に薄れていくようになった。戦後以降の新築の家では、土間の規模が縮小され現在の一般的民家に見られるような玄関の役割しか持たない。

エンバラ

土間と中ノ間などの居室の境界にある、居間や中ノ間と同じ高さの板張りの床面である。田畑の仕事の途中、家に上がる時間がない時や仕事着が汚れている時などにエンバラで昼食をとる、隣近所の人がちょっと立ち寄って話をするときベンチ代わりにする、エンバラの床下を農具などの収納場所にする、豆や山菜をエンバラで干すなど、その用途は多岐に渡った。エンバラの存在は加賀地方では見られることはなく、奥能登特有の構造である。

ダイドコロ（台所）・ナガシ

土間の片隅にあった。ナガシでは食材を切るなどの炊事の準備を行い、ダイドコロにあるイロリで煮炊きを行った。ダイドコロは家族の日常の食事・休息、親しい人と世間話などをするくつろぎの場であった。ナガシは下流しが一般的であり、主婦は腰をかがめながら調理を行っていた。下流しは主婦にとって重労働であったが、各家庭に水道が通っていなかった時代は河川や井戸から桶に水を汲んできていたので、水場の位置が低かったこと、日常は汁物と漬物といった質素な食事内容であったことなどもあり、高流しにする必要性はなかった。

煙突のついた改良かまどが普及して以来、日常の食事の煮炊きはイロリのあるダイドコロから

ナガシのかまどで行われるようになった。また、テレビなどメディアの影響で都会の生活や電化製品の普及に伴い、ダイドコロやナガシは急速に変化を遂げた。食堂の増築、あるいはナガシを食堂に改造する家庭が増え、日常の食事の場はダイドコロから食堂に移された。ダイドコロは名前だけが残し、以前の茶ノ間のような客付けの場となっている。

茶ノ間

茶ノ間は家の真ん中に位置し、家の間取りは茶ノ間を中心に配置される。特色として、神棚が置かれ神が祀られていること・イロリ（囲炉裏）が置かれていることなどが挙げられる。

イロリを囲って家族が食事を取ったり、団欒したり、あるいはイロリで食事の煮炊きをしたりするなど、茶ノ間のイロリは家庭生活と密接に関わっていた。茶ノ間では村の寄合も催されていたが、その意味は「神様の前で発言し、決め、守る」というところにもあったと考えられる。

日常の食事をダイドコロで行うようになってからは、茶ノ間の家族の居間としての役割は薄れていった。茶ノ間は神棚を祀ってあることから、農業に関連する神事の行事が行われていたが、やがて祭礼行事は廃れていき、茶ノ間に対する意識にも変化が起こった。昭和45（1970）年当時には既に、茶ノ間に箆箆などの大きな家具を置いていたり、茶ノ間が通路と化していたりするなど、かつてのような団欒・祭事の場としての役割は見られなくなっていった。

ナンド（納戸）

家の主人夫婦の寝室である。主人の世代交代により、若い夫婦がここに移ってくる。

鍵座敷

座敷・中ノ間・仏間を合わせて「鍵座敷」と呼ぶ。

座敷の正面には床の間があり、仏画の掛け軸や工芸品などを飾る。珠洲地方には「床の間を見れば宗派が判る」という言葉があり、床が二分されているのは真宗、三等分されているのは禅宗の家庭である。座敷での接客は、神官や寺の住職、社会的地位のある人など気の張った来客しか通さなかった。中ノ間では主に一般の客を接待し、宿泊させた。中ノ間のことを「デイ」「デエ」と呼ぶ家庭もある。

奥能登地方の民家は、納戸や台所など日常生活が営まれる部屋に比べ、鍵座敷など行事や接客のための部屋が、家の表側の位置に優位に間取りされている。宗教行事や結婚式・葬儀などの行事での接待は、奥能登地方では重要な村付けを意味していたため、民家ではその空間を特に重要視していた。

3. 住宅利用の変化とその社会的背景

本節では、以下に挙げる二例をもとに、宝立地区の住宅利用の変化の社会的な背景を考える。

なお本文中に登場する間取り図は、筆者の訪問先において住民の方が書いてくださった間取り図やお話、また実際に家の中を拝見させていただいたものをもとに、筆者が作成したものである。また二つの家庭には二階部分もあるが、本節では割愛する。

3.1 住宅利用の実例

Aさん（中鶴島 女性 60歳代）は父親から引き継いだ現在の住居に、夫と実母の三人で生活をしている。

Aさん宅では昭和6（1931）年頃、最初の住居が建てられた。家の間取りは現在の住居と基本的に同じであるが、土間は現在の大きさの二倍あり、農作業や農作業中の休息の場として用いられた。また、昭和35、6（1960、61）年頃までは畳が傷むのを防ぐために、来客のない日常生活時には畳を部屋の端に積んでおいて、床を板張りのままにしていた。

Aさん宅は海のすぐ側にあり、やがて浜風で家が傾いて襖や戸が閉めにくくなるなどの障害が出てきた。そのため、昭和46（1971）年頃に最初の家を取り壊し、地元の大工によって基礎をしっかりと作り直してから家の新築が行われた。間取りは上図に示した通り、この地域に多い伝統的なものとなっている。土間が狭くなったこと以外は、間取りは以前の家と同じままである。

一階部分は上図の通り、主に来客・水場で占められているが、二階は家族の寝室・子供部屋が計4部屋ある。また、Aさんの父親より「水回りは故障しやすいので、母屋内には入れないように」と言われてきたので、トイレや風呂場などの水場は別棟になっている。Aさん宅では2015年現在、上水道と井戸の両方を用いて水の供給を得ている。上水道はお風呂やトイレ、井戸水はキッチンや畑、庭の鉢植え・鯉池、といった使い分け方をしている。Aさん宅の他にも井戸を利用している家庭は近所に多く、「井戸を潰すと罰が当たる」という言い伝えを信じて潰さない家も多いのではないかとAさんは語っていた。

2節で述べたように、以前のAさん宅にはダイドコロ・茶ノ間の両方にイロリが設置されていた。現在の家ではダイドコロ（図中キッチン部分）のみに置かれているが、普段はイロリのスペースに畳を敷き、その上に机を置いている。冬は掘りごたつとして利用することもあるが、イロリから直接暖を取ることはない。茶ノ間にあったイロリは、火をともしと仏間の仏壇がすすけてしまうので、家を新築したときになくなったそうである。

日常的に来客の多いAさん宅では、土間で近所の方とお喋りをする事も多く、建て替え以前から現在までも、土間は休息・近所の方との歓談の場である。筆者の取材中も、土間と「デイ」の間にあるエンバラに近所の方が腰かけて、キッチンにいるAさんと歓談する様子が見られた。また「デイ」は通常、来客を家に上げる際に通す部屋にしている。

冠婚葬祭で人が多く集まるときには、田の字型のスペースにある襖を取り外し、人が大勢入れ

るようにする。最大で52人ほどが家に集まった事もあった。しかし昭和52(1977)年のAさんの父親の葬儀や、同年のAさん夫婦の結婚式を最後に、家を利用した大きな冠婚葬祭行事を開催することは殆どなくなってしまった。近所の中でも自宅で結婚式を行ったのは、Aさん夫婦が最後だそうである。平成22(2010)年のAさんの娘の結婚式は金沢の会場で行い、近所の人が金沢まで行く、といったような地域を挙げた結婚式への参加はなかったそうである。現在Aさん宅に人が多く集まる機会は、毎年9月15日に行われる祭礼行事に20~30人、周忌に30~40人程度の親族が集う時などが挙げられる。その際に座敷は来客用の寝室として利用されるが、日常は座敷で何か作業をするといったことはあまりなく、物もあまり置かれていない。

図2 Aさん(中鵜島 女性 60歳代)宅 一階間取り図

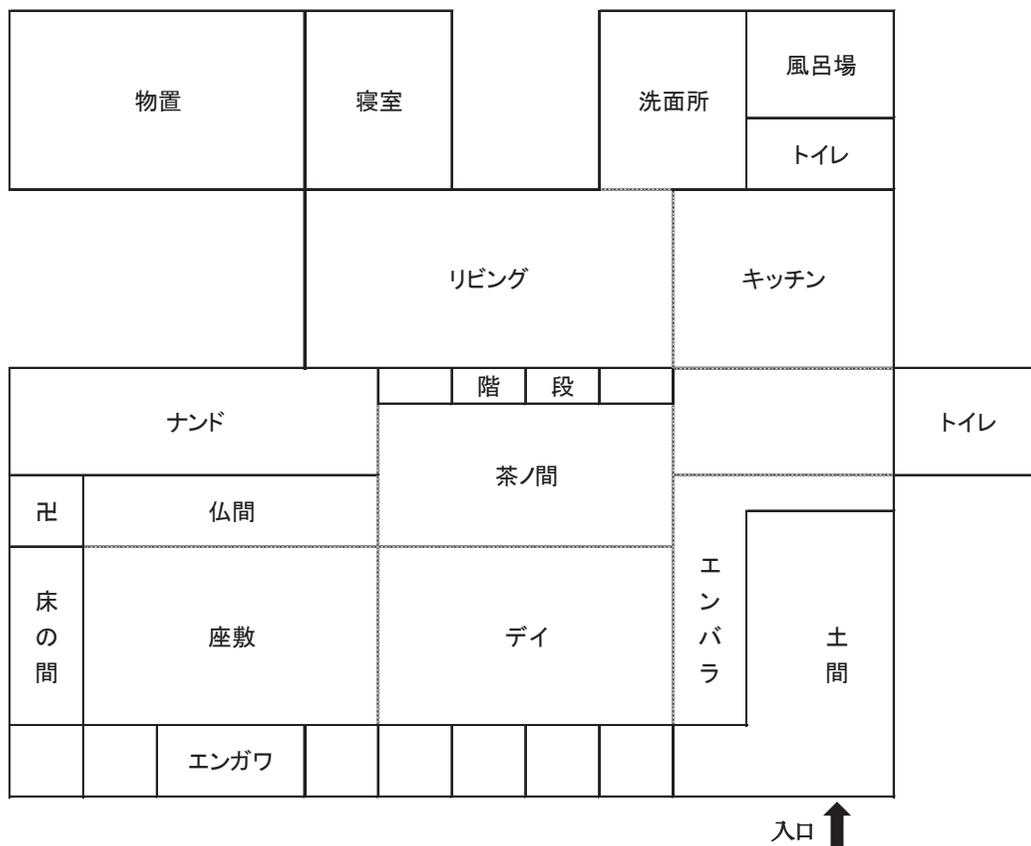
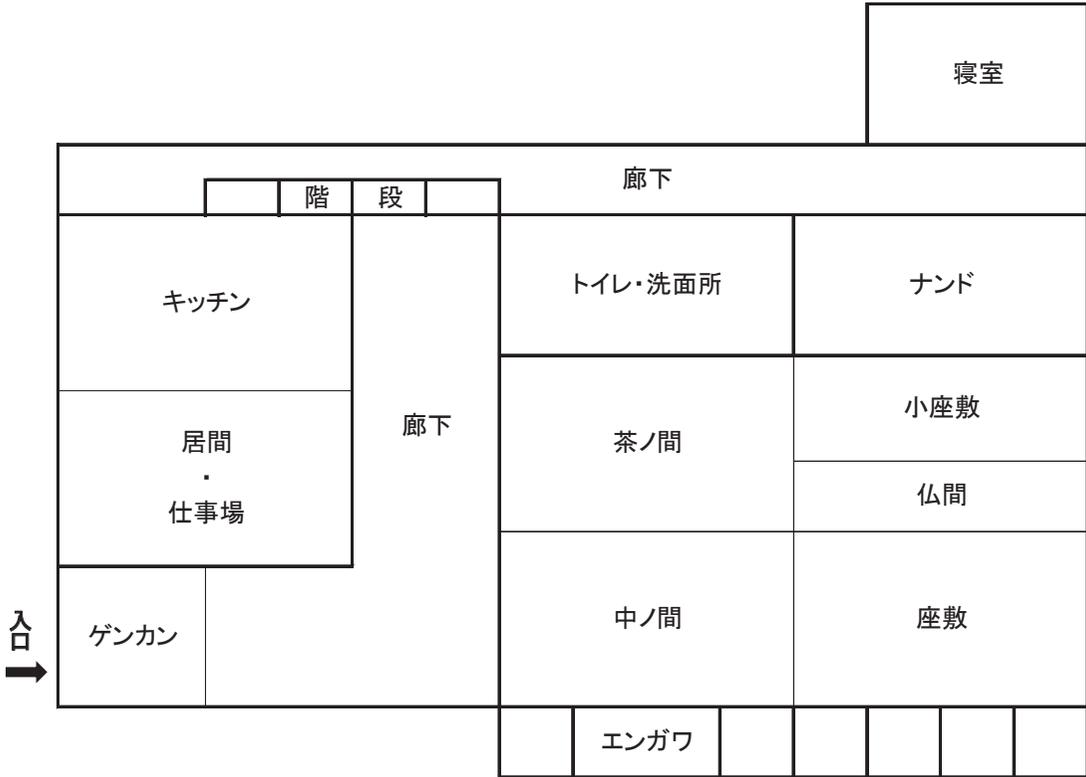


図3 Bさん（白山 男性 60歳代）宅 一階間取り図



Bさんは父親が引き継いだ現在の住居に、妻と二人で生活をしている。

昭和56（1981）年に現在の住居を新築する以前は、築100年程の家が建っていた。土間は家の三分の一ほどの割合を占め、流し場や農作業を行っていた。田んぼで仕事を終えた後は体が泥だらけになるので、土間は農作業中の休憩・食事をする場でもあった。また、農作業中の便宜や臭い避けのために、トイレは納戸の横に設置されていた。

現在の住居は、地元の大工に建ててもらった。冠婚葬祭での利用を考え、上図のように田の字型の座敷スペースを作り、開放的な設計にした。一階は行事での利用や自営業であるBさんの仕事のスペースとして、二階は家族や来客の寝室として利用されている。

現在の家を建てた際、茶ノ間にイロリを設置した。掘り炬燵として利用したこともあったが、現在では板を張り、イロリとしての利用はしていない。

地域で祭りがある時はエンガワを開放し、近隣住民を縁側から家に上げていた。その際、オードブルや酒をあらかじめ用意し、田の字型のスペースで宴会を行う事もしばしばあった。祭りがあるときは20人前後を家に呼ぶ、あるいは自分が近所の家に行く「お呼ばれ」があったが、10年

ほど前から少子高齢化などの影響で「お呼ばれ」の習慣が薄れてきているそうである。近年では親戚が集まる程度だという。

また 1990 年代半ばに自宅で葬儀を行った際、エンガワを開放し、田の字型のスペースをめいっばい利用して参列者用の席とした。100 人程度の参列があったという。しかし、4、5 年ほど前から自宅葬を開く家は地域になく、セレモニーホールの利用がほとんどだと言う。また、田の字型のスペースを日常的に利用する事もあまりない。

3.2 住宅利用の変化の社会的背景

上の二例からわかる通り、少なくとも昭和 50 年代までの宝立地域では、農業・冠婚葬祭での利用を考慮に入れて作られた家が多い。上の二例以外の住居でも多く見られた田の字型の畳部屋、広々とした土間や廊下が、それを物語っている。しかし現在では、建設当初と住宅利用の方法が変化してきている。

「冠婚葬祭を家で行わなくなったこと」は利用の大きな変化の一つである。聞き取り調査の際では、「昭和 57~58 (1982~83) 年頃に、“陽慶閣”と“寿殿”という結婚式場が珠洲市内に建てられた」と語る人が多かった。その事と、自宅で挙げる結婚式は昭和 52 (1977) 年の A さん夫婦が近所で最後であった、という話から、自宅外で結婚式を挙げるという選択肢は、昭和 50 年代あたりから生まれたのではないかと推測できる。先に挙げた 2 つの結婚式場は 1990 年代後半に営業を終了したそうである。その理由として、ほぼ同時期から金沢で挙式する夫婦が増えてきた、と語る人が多かった。また、平成 15 (2003) 年に珠洲市にセレモニーホールが建設されて以来、葬儀は自宅ではなくセレモニーホールで開かれることが通常となっている。

かつて冠婚葬祭などの行事は、一つの家に近隣住民が集まり、会場設営・来客への食事作りなどをはじめ、地域で協力して行事を運営していくものであった。しかし、セレモニーホールでの行事の運営はホールが主導になって行うため、自宅で行うよりも家族・近隣住民による準備の負担がかなり軽減されるようになる。地域の高齢化進行を考えると、行事での負担を軽減するために積極的にホールを利用するのは、自然な流れと言っていいのかもしれない。自宅外の会場で冠婚葬祭を催すようになったため、広々とした田の字型の間取りを活用する機会が少なくなり、このことから住宅の間取りも変化していくのである。

また、農作業の形態の変化も、間取りや住宅利用の変化の要因になったのではないだろうか。2 節で記したように、かつては「デイがなくても百姓はできるが、ニワがなくては百姓はできぬ」という言葉があったように、ニワは農家にとって重要な農作業の場であった。しかし、脱穀・調整などの作業が機械化されたことで、それらの作業は屋外やナヤで行われるようになり、ニワで行われる必要はなくなったのである。また、農業を主たる生業にする家庭も減り、企業などで勤める

人も増えてきただろう。これらの要因から、ニワの縮小がはじまったと考えられるのではないだろうか。

4. 考察

第3節では実際の住宅利用を見ながら、その変化の背景について考察した。本節では先に記述したものの以外で住宅利用や間取りの変化の要因となったものを、文献や聞き取り調査から読み取り、宝立地区の住宅利用の変化について考察をしていく。

4.1 生活改良普及事業

本項では、珠洲市内で行われた生活改良普及事業について、『珠洲市史』や『宝立の今昔』を参考に述べていく。

生活改良普及事業は、戦後間もない昭和23(1948)年に「衣生活と食生活の改善」を目的とし、農林省主導で開始された。珠洲市内でも珠洲農業改良普及所が中心となり、「家族の健康を向上させ、主婦の労力の軽減を図る」ことを目標の一つに挙げられた。働きやすい高流しを作ること・簡易水道や改良かまど、冷蔵庫の設置などの台所改善や、採光のための窓を開け薄暗さを追放することなどが、当時の主な改善案として挙げられる。

事業開始当初は改善が進まなかったが、高度経済成長の波に乗り経済力ができたのを背景に、水道やガス普及など台所改善が進んだ。昭和初期までは井戸を掘る家が多かったが、水質が悪く飲料水には乏しい時代であった。しかし、昭和29(1954)年に簡易水道が開設されたことにより蛇口からの給水が普及し、昭和39(1964)年には上水道が建設された。また、プロパンガスの普及は昭和36(1961)年から飯田地域の一般家庭からはじまり、昭和40(1965)年以降には農村部の家庭へ浸透していった。昭和40年代の高度成長期にはステンレス製の調理台や冷蔵庫の普及があり、これまでの「ナガシ」の環境は大きく改善されたものに変化した。

一方で、炊事の一切は改善されたナガシで行われるようになったため、かつてはイロリで行われていた食事の煮炊きをする事はなくなった。また、電気・石油による暖房器具が導入されたことにより、ダイドコロのイロリの実質的機能はなくなっていった。

また、珠洲市内の生活改良事業の中には、「明るく健康な暮らしを目指して無駄なつきあいをやめる」ことも生活改良計画の一つとして挙げられていた。例としては、祝酒やまんじゅう配りを廃止し、冠婚葬祭の簡素化を図るなど、地域の様々な伝統的しきたりが廃止された。

生活改良普及事業は農家の日常生活を便利なものに改善した。その一方で、住宅内で営まれてきた生活風景や行事のしきたりなど、地域の伝統的な習慣がなくなる要因にもなったといえる。

4.2 住まいに対する意識の変化

間取りの変化の要因には、住民の意識変化によるものも大きい。高度経済成長期までに建てられた民家は、冠婚葬祭などで人が多く集まる事を念頭において設計が行われていたが、それ以降は家族のプライバシーを守る空間としての意識が発生するようになった。例えば第3節で挙げたBさんの住宅の間取りのように、鍵座敷・茶ノ間といった行事で使用する社会的空間と日常生活空間を、廊下によって隔てている家はその時期から増えている。二つの空間を廊下で隔てることで、行事の際にも家庭の私的空間を確保できるのである。

宝立地区の住宅の間取りは、地域に対して開かれたものから、社会的な空間と家族の空間を明確に分けたもの、そして家族の中でも「個人」のプライバシーを重視したもの、といった過程をたどって変化してきている。そうした間取りの変化の過程について、親子二代で地元の大工として働くCさん（下八幡、男性、50歳代）からお話を聞いた。

Cさんによれば、1980年代頃から田の字型の間取りがある住宅建設を請け負うことが減り始め、最後に請け負ったのは7、8年前のことだそうである。その辺りから都会型住宅が珠洲地域にも増え、ハウスメーカー企業による住宅建設も増加してきた。各家屋で和室が占める割合も次第に減っていき、30年前の都会型住宅では部屋数の半分ほどが和室で構成されていたが、現在では家一軒につき和室が一部屋、といったことも珍しい事ではなくなっている。Cさんは伝統的な間取りを持った家のリフォームを請け負うこともあるそうだが、近年では田の字型の部屋のうち三部屋を独立した個人部屋にし、残りの一部屋を家族が集う座敷にする、といったリフォーム例が多いようである。

このように珠洲地域内の住宅では、大勢の来客が集まるスペースの縮小に留まらず、和室そのものの減少が目立つ。この要因として、洋室に比べ和室の設置・維持のコスト、設計の工程の長さがかかることがある。老人の介護のしやすさの問題を考えて、ベッドの置ける洋室を重視する家庭もあるだろう。また住宅の利用目的が、人が集うためのものからプライバシーの確保のための場になったことが、家の間取りの様式の変化の大きな要因であると考えられる。その背後には、少子高齢化の進行や若い世代が珠洲から離れることによって、行事の担い手がいないために、各家で行われた行事が廃れてしまったことなどが原因としてあるのではないだろうか。

宝立地区の住宅利用や間取りの変化には、様々な背景があることが調査からわかった。本章で述べたものには、住居内の生活設備の整備・改善、冠婚葬祭など自宅で行う行事の衰退、農作業の変化や生業の変化など、経済や社会的要因によるもの、あるいはプライバシーの重視傾向など意識面によるものに大別される。

現在の宝立地域内の社会的状況から、今後も伝統的間取りを受け継いだ新築住居は少ないだろうと推測する。冠婚葬祭の開催状況や、若い世代の勤労形態、少子高齢化や若い世代の市外流出

など人口情勢などを見ると、伝統的な間取りは現状にそぐわないように感じられる。

かつて地域に根差していた伝統が消えていくのは寂しいことではあるが、維持のためのコストや環境が整備されない以上、仕方のないことなのかもしれない。

5. おわりに

珠洲での実習中、本文で挙げた家をはじめ、多くのお宅に上がらせていただいた。ところどころに修繕を加えながらも何十年と家庭生活が営まれ続け、大切にされてきた家ばかりであった。少し前まで住宅は近隣の方との交わりの場でもあり、そのにぎやかな様子を想像すると伝統的な間取りを受け継いでいく事の尊さを実感せずにはいられない。しかし、宝立町の生活・社会状況から察するに、その家で暮らす人々が一番快適に過ごせるような家づくりをすることが大切なのであって、伝統を残すことが必ずしも正義であるわけではない、とも感じる。家の間取りに限らない「地域の伝統」をどのような姿で継承していくかが、少子高齢化や若者離れの進むこの地域の大きな課題となるであろう。

末筆となってしまったが、このテーマで報告書を執筆するにあたって、何度も丁寧にご指導いただいた西本・鏡味両先生方、そして私の拙い取材に対して、快く応じてくださり親切にお話をしてくださった珠洲市宝立町の皆様に、心からの感謝を申し上げたい。

注

1) 「昭和四十年代に入り、高度経済成長時代になると、住宅全体を改修する農家が続出した。(中略) その土地の顔であった農家のたたずまいは無くなってしまった」(石川県農村文化協会 1987:99-100)

